

的野雄
|| 編著

昭和文学
俳句アルバム
14

楠本憲吉の世界



昭和俳句文学アルバム

14

的野雄
|| 編著

南本憲吉の世界

昭和俳句文学アルバム⑭

楠本憲吉の世界

発行・一九九一年五月十五日

定価・一七〇〇円（本体一六五〇円・税五〇円）

編著者・的野 雄

発行者・山田浩路

発行所・株式会社梅里書房

東京都杉並区梅里一丁目十五番地十三—一〇一
電話〇三・三三三・六四三一（代） 一六六

印刷・三和印刷株式会社

長野市川中島町一八三番地一 一三八—一二二

乱丁・落丁はお取り替えます。

©Yu Matono, Printed in Japan

製本・松栄堂製本所

ISBN4-87227-016-9

楠本憲吉

くすもとけんきち



目次

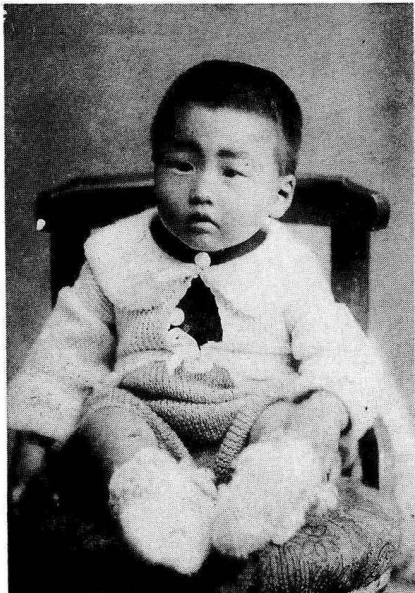
評伝・楠本憲吉	的野 雄	4
楠本憲吉作品二百句抄	(抄出)的野 雄	27
楠本憲吉掌論	吉本 忠之	70
憲吉俳句鑑賞	吉本 忠之	93
楠本憲吉著作目録	吉本 忠之	103
楠本憲吉略年譜	的野 雄	105
「二百句抄」句集解題	吉本 忠之	110
執筆者・資料協力者等一覧		110



東京・足立区の炎天寺。楠本憲吉は、毎年この寺で行われる「一茶まつり」の、小中学生俳句の選者を石田波郷から引き継ぎ、昭和38年以降終生つとめた。



憲吉と姉純子〔昭和2年頃〕



〔大正12年頃〕

評伝・楠本憲吉

的野 雄

(一)

大正十一年十二月十九日、楠本憲吉は、大阪市東区北浜二一九、いわゆる船場に、父栄三郎、母濱の長男として出生した。

生家は、天保元年（一八〇三）初代灘屋萬助の創業による料亭「灘萬」で、父栄三郎はその四代目当主である。「灘萬」が、長崎料理を基調とした大阪料理の店として、今日につづく規模と格式の基礎を築いたのは二代目萬助であった。大正八年、第一次世界大戦

中央・憲吉と、楠本家
の子ども達（右は祖母）
〔昭和16年頃〕

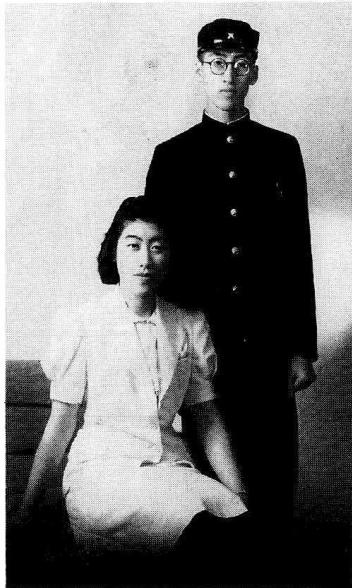


後、講和会議がパリで行われた。日本の全権大使は西園寺公望公、その
随行の板前に、三代目灘屋萬助が選ばれた。この快挙によって、大正中
期の「灘萬」は超一流の名を冠せられるに至った。楠本憲吉は、このよ
うな「灘萬」を背景に生を享けた。

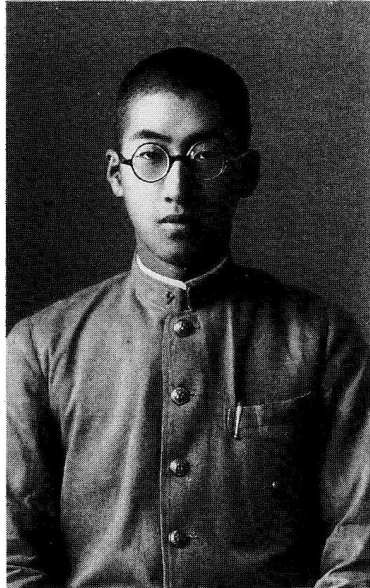
「船場」と呼ばれるこの地の慣習では、長男は祖父母によって大切に育
てられ、次女が家業を継ぐために、幼時
から手厳しく、種々の稽古事を仕付けら
れる。

五人の姉弟があつたが、憲吉は、一つ
年上の姉・純子と幼少よりとくに気が合
って、生涯何かと励まし合い助け合った。

憲吉は、慣習にしたがい、阪神間の岡
町の別宅で祖父母に育てられたが、祖父
の没後、祖母と一時、大阪の土佐堀に移
り、今橋五丁目の愛日小学校に入学し
た。二年のとき、また岡町へ戻り、本山



姉純子と憲吉
〔慶応大学予科時代〕



灘中学時代

小学校に転校した。姉・純子は、今橋の本店裏の住居で学校と稽古事の日々であったが、憲吉が岡町にあったときは、休日を利用して遊びに出向き、土佐堀の頃は近くであり、よく遊びに寄った。由緒ある天神祭には、ふたり連れ立って、お稚児さんに出たりした。

祖母の背に見し蝙蝠と古き帆と 憲吉
は、後年の一句である。

昭和十年、神戸本山小学校を卒えた憲吉は灘中学校へ進学した。

(二)

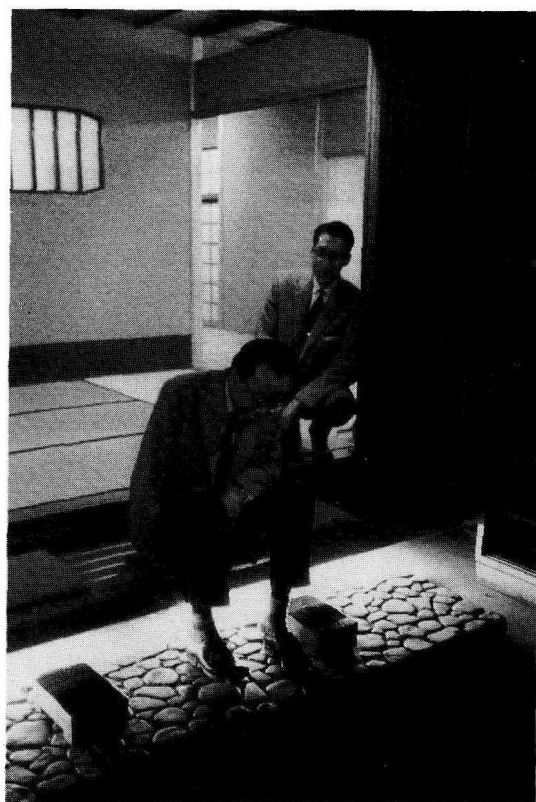
中学二年の国語の時間、担任の清水実教師が、黒板にたたきつけるように書いた俳句、

垣の薔薇白きが散りて径白し 秋桜子

に、憲吉はつよい感銘を受けた。

その印象をクラスメートであり、親友の遠藤周作に

遠藤周作と憲吉
〔昭和36年頃、灘萬
東京店玄関にて〕



話したところ、遠藤はポカンとした顔つきで、

「白いばらが径に散れば、白くなるのは当たり前やないか」

この話は、後年憲吉が、遠藤との交友の挿話として、しばしば書いている。

遠藤周作は、すでに中学生時代から、自分は将来小説家になると宣言していたが、憲吉が、ものを書く楽しさ、創作するよろこびを覚えたのは、国語教師の清水実の教えによるところであり、そして、決定的な示唆を受けたのは遠藤周作からであった。

衝撃的な二度目の俳句との出会いは、それから十年後、軍隊内務班においてであった。慶応義塾大学法学部へ進んだ憲吉は、昭和十八年十二月、学徒出陣して高槻工兵隊へ入隊した。日夜、初年兵教育の辛苦が続いたが、或る夕刻点呼のと



いう次第である。

この中隊句会で、抜群にすぐれていたのがときの中隊炊事班長、岩田秀雄軍曹、俳名伊丹三樹彦であった。三樹彦は日野草城主宰「旗艦」解散後、安住敦等の「多麻」に籍を置いていた。

いかに天皇陛下の命令で作句を始めたにせよ、もし、ここで伊丹三樹

き、伝言で中隊長室に呼ばれた。

「只今から中隊俳句会を行う。お前は文科系の大学出身だから俳句は作るだろう。席題は『焚火』『短日』三十分までに五句作れ」

「いえ、俳句など作ったことはありません」と、出かかった言葉を呑みこんだのは、部屋中央のテーブルに燦々と並べられた、夢かと紛う、まんじゅう、みかん、ぜんざい、酒、ビールが目にとびこんだからである。中隊長命令は即天皇陛下命令である。従って憲吉は、天皇陛下の命令によって俳句を始めたとき、



左より、伊丹三樹彦、憲吉、桂信子〔昭和30年頃〕

彦に会わなかったならば、俳人楠本憲吉はなかったであろう。その後、工兵学校を卒えた憲吉は、昭和十九年十二月見習士官となり、関東軍転属の挨拶に三樹彦を訪れた。

——もし、この戦争が終わって、お互いにいのちを長らえていたならば、又会おう——

その「もし」が現実となり終戦となった。神戸の自宅へ復員した憲吉は、直ちに伊丹古町の三樹彦居を訪ねた。草城復活の希望に燃える草城門に燦然たる新星が加わった。

(三)

戦後の十一月十一日、三樹彦、桂信子、小寺正三、安川貞夫、楠本憲吉、播本清隆、伊丹公子等、その推進メンバーによる「まるめろ」グループの第一回会が、俳句復活の草城を囲んで、熊野田の小寺居で行わ

慶大俳句

第1回	山茶花やいくさにやぶれたる国の	草城
第2回	この句会では、憲吉の作品も草城選に入選したが、	
第3回	翌年の第二回句会では、	
第4回	山眠り椎の実あまた降らせたり	憲吉
第5回	が高点句となった。憲吉俳句の開眼である。	
第6回	憲吉の俳句活動はすでに活発であった。高柳重信等	
第7回	の「群」に参加し、翌二十一年、草城以下四者共宰の	
第8回	「太陽系」に加盟し、大学に復学して、大島民郎、清崎	
第9回	敏郎らと「慶応義塾大学俳句研究会」を設立、機関誌	
第10回	「慶大俳句」を創刊した。さらに各大学の俳句部に呼	
第11回	びかけ、大学生だけの俳句大会を開催した。当時、早	
第12回	稲田大学の「早大俳句」には高柳重信、中川螢思等の	
第13回	面々があり、大橋巨泉が名披露を發揮したという。	
第14回	この頃にして憲吉は、長身、白晢、颯爽として折り	
第15回	目正しく、明晰、語り口も円滑、明快であった。どこ	

創刊号

第1回	山茶花やいくさにやぶれたる国の	草城
第2回	この句会では、憲吉の作品も草城選に入選したが、	
第3回	翌年の第二回句会では、	
第4回	山眠り椎の実あまた降らせたり	憲吉
第5回	が高点句となった。憲吉俳句の開眼である。	
第6回	憲吉の俳句活動はすでに活発であった。高柳重信等	
第7回	の「群」に参加し、翌二十一年、草城以下四者共宰の	
第8回	「太陽系」に加盟し、大学に復学して、大島民郎、清崎	
第9回	敏郎らと「慶応義塾大学俳句研究会」を設立、機関誌	
第10回	「慶大俳句」を創刊した。さらに各大学の俳句部に呼	
第11回	びかけ、大学生だけの俳句大会を開催した。当時、早	
第12回	稲田大学の「早大俳句」には高柳重信、中川螢思等の	
第13回	面々があり、大橋巨泉が名披露を發揮したという。	
第14回	この頃にして憲吉は、長身、白晢、颯爽として折り	
第15回	目正しく、明晰、語り口も円滑、明快であった。どこ	

「慶大俳句」創刊号表紙（右）と裏表紙（左）。憲吉、大島民郎、清崎敏郎の他、見学玄、大石秀夫、佐藤脩一、平柳青旦子、宮脇白夜などが参加した。

れた。

山茶花やいくさにやぶれたる国の 草城

この句会では、憲吉の作品も草城選に入選したが、

翌年の第二回句会では、

山眠り椎の実あまた降らせたり 憲吉

が高点句となった。憲吉俳句の開眼である。

憲吉の俳句活動はすでに活発であった。高柳重信等

の「群」に参加し、翌二十一年、草城以下四者共宰の

「太陽系」に加盟し、大学に復学して、大島民郎、清崎

敏郎らと「慶応義塾大学俳句研究会」を設立、機関誌

「慶大俳句」を創刊した。さらに各大学の俳句部に呼

びかけ、大学生だけの俳句大会を開催した。当時、早

稲田大学の「早大俳句」には高柳重信、中川螢思等の

面々があり、大橋巨泉が名披露を發揮したという。

この頃にして憲吉は、長身、白晢、颯爽として折り

目正しく、明晰、語り口も円滑、明快であった。どこ

祝
鎌倉や憲吉節子寒からず

草城



【右】節子と結婚
〔昭和22年12月10日〕

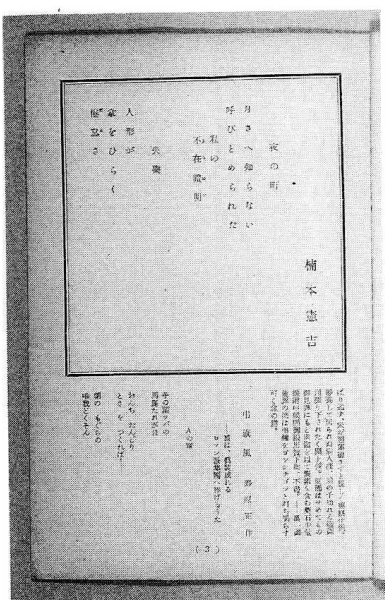
【左】日野草城から
贈られた祝句

の席でも、自然なたちで際立っていた。『白面の貴公子』などとも言われたが、ありがちな馴染みにくさは少しもなく、話を交わせば、誰彼問わず、極めて気易く、親切で、却って相手側が自らの構えを省るくらいであつた。そのような風貌は、奇しくも、師草城の若き日のネガに無理なく重なるものがあつた。

その草城は「慶大俳句」十一号（昭和二十二年九月刊）に記している。

「見渡したところ、楠本憲吉ほど（略）、新人らしい意欲と感受とを持ち、且つ新人らしい可能を蔵してゐる俳句作家はほかにゐないやうだ。（略）」

彼はやゝ、その特質を明らかにしはじめたやうであるが、之を以て彼の個性の定立と見るのは未だ早いやうである。（略）これらの撰取物が彼自身の血肉になり切るには尚相当の年月を要するであらう。彼はまだ



「弔旗」昭和23年11月創刊号表紙(右)と作品頁(左)。当時の憲吉は、多行作品を試みている。

まだその遍歴と修業とを続けなくてはなるまい。そして今までに類型のなかつた自己を形成し得た時、楠本憲吉は作家として揺がぬものとなる。道は遠いが、それはもう始つてゐる。若さと才能にあふれたこの未熟を祝福しその可能に大きな期待を懸ける」

(四)

昭和二十三年十二月、「太陽系」は、草城の後退、富沢赤黄男主峰となつて「火山系」と改題、憲吉はひきつづきこれに加盟し、「群」解散後の「弔旗」にも参加した。「弔旗」は、高柳重信、野原正作、渡辺貞治らを擁し、憲吉も、赤黄男門として深く前衛に関わつた。

一方、草城は、三樹彦を編集の主軸として昭和二十四年十月「青玄」を創刊、主宰し、「まるめろ」はこれに吸収された。



「青玄」五周年記念全国大会。二列目右端・憲吉。他に、橋本多佳子、鈴鹿野風呂、石川桂郎、平畑静塔などの顔が見える〔昭和29年10月10日、朝日新聞大阪本社講堂〕

憲吉の「青玄」参加は、昭和二十七年五月である。前々年、青山学院中等部社会科講師であった憲吉は、生活のこともあり、家業「灘萬」に入社、一度帰郷して、昭和二十六年一月上京し、「灘萬」東京店を委せられた。

その五月、処女句集『隠花植物』が上梓となった。発行者高柳重信によるこの初版は、限定一二〇部。後年さらに四版を重ねた。

『隠花植物』は憲吉の名を高めたが、活動に比例して酒量も上がったのであろうか。翌二十七年初頭、入院し胃潰瘍を手術した。最近の医術であつたら果たして切除をしたかどうか、結果論めくが、このときのそれとなき後遺が、あとからの数多の病歴に多分に影響したようである。

「青玄」に参加した憲吉は、まず青玄評論賞、つづいて青玄作品賞を受賞した。

憲吉の評論集は、『近代俳句の成立』（昭和三十年）、『一筋の道は尽きず・昭和俳壇史』（昭和三十二年）とつづいて

十二月号

[illegible]

青玄賞を受けて

兵 領 卒

[illegible]

著すべき歴史のべ、整頓して下さつた伊作の遺稿に負うところ
 が多大であり、この機に改めて遺稿の意を著さねばならざらん

刊行された。

綿密、真摯な論稿の影には当然、周到な資料の蒐集と豊富な情報探索があった。その資料としての俳書類の蒐集については、神田古書街の紙価を高からしめたとの噂さえ流れた。『昭和俳壇史』の序において、先輩の山本健吉は、次のごとく記している。

「俳句の歴史を書く」ということは、一般の文学史を書く以上に困難な条件がある。それは資料をそろえることが、まず大変なことだからである。(略)

私は『昭和文学全集』の現代俳句集に、昭和俳句史を添えたとき、楠本君が輯集した資料によるところが少くなかった。俳句史を書くこうと思えば、まずその前提として資料の輯集家でなければならぬのだ。楠本君はこの点では、労をいとわず実によく集めている。昭和俳句史を書くための、第一条件をそなえている。

その上に君は、俳句の実作と評論の二つながらよく